

聖書：第二サムエル記 22 章 31～51 節

説教：神、その道は完全

22 章 1 節には、「主が、ダビデのすべての敵の手、特にサウルの手から彼を救い出された日に」歌った歌であると書かれております。サウルはダビデにとって職場の上司であり、また義理の父という間柄でした。

先週は 30 節までの前半を見ました。今日はその続きで後半のところ、ダビデとサウルの関わり方をたどりながら、そこからどのような神の恵みが見えてくるのかを考えてまいります。

1 サウルの手から救い出された日に (1 節)

1) 戦争用語が多く使われているが？

ダビデは羊を飼う農家の末っ子で、兄たちから軽く見られるほど目立たない存在でした。そんなダビデが、一夜にして大スターになっていく一つの事件がありました。サウルが敵のペリシテ人と戦っていたときです。敵の陣地からゴリヤテという身長は 3 メートル近くもある大男が出てきて挑発します。ところが、みなはこわがって尻込みをするばかり。そんなときにダビデが前に出て、一発の石でこのゴリヤテを倒してしまいます。これを見ていたサウルは、すぐにダビデを召し抱え、やがてイスラエル軍のリーダーにまで出世していきます。

ここには、盾とか弓とか敵を倒すとか、戦争用語が多く出てきます。ダビデの職業は軍人ですから当然のことと言えます。ですからこの 22 章は、すべてダビデが戦場で実際に戦ったときのことを歌った歌のようにも思

えます。でも、戦争に関する言葉や用語が使われているから、全部が実際の戦争のことを指すとは限りません。聖書では、言葉は同じでも違うものを指すことがしばしば起こるからです。

たとえばイエスのこのことばを思い起こしてみましょう。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」(ヨハネ 2 章 19 節) これを聞いていた人たちは、「五十年近くの時間をかけて建てた神殿を三日で建てられるはずがない」と言って笑いました。その事情を、聖書は「イエスのご自分のからだのことを言われたのである」と説明しています。「神殿」という言葉は同じでも、いっぽうは建物ととり、イエスのご自分のからだのことを指していた。そういうことがあり得るのです。ですから聖書を読むときはよくよく注意しなければなりません。

2) 「私を憎む者」とはだれか (41 節)

例として 41 節を見てみましょう。「また、敵が私に背を向けるようにされたので、私は私を憎む者を滅ぼしました。」敵が私に背を向けるというのは、敵がもうこれは勝ち目がないと見て取って、逃げ出すことを言います。圧倒的な力の差で敵を打ち負かしたということでしょう。

さて、問題は「私を憎む者」とはだれのことかです。サウルの手から救い出された日に歌った歌なのだから、「私を憎む者」とは、サウルのこと、あるいはサウルの手下ども、そういう風に連想するでしょう。

2 ダビデとサウル

1) ダビデの信仰

でもそう考えていくとどうしても辻褃が合わないことが出てくるのです。こういうことです。ダビデは敵を「滅ぼした」とか、「道のどろのように、粉々に砕いて踏みつけた」と言っています。では、実際にサウルを滅ぼしたのでしょうか。サウルの部下を踏みつけたのか。そんな話は聖書には一つも書いてない。いや、できなかったと言ったほうが正確でしょう。というのは、ダビデが自分の口で証言しているからです。ほら穴に隠れていたダビデのところへ、サウルが何も知らずにひとりで入って来たときのことです。ダビデの部下は、はやくサウルを殺す命令を出してくれと頼むのですが、ダビデはこう言った。「私が主に逆らって、主に油注がれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。彼は主に油注がれた方だから。」(第一サムエル 24 章 6 節)

これがダビデの絶対に譲ることのできない信仰でした。サウルを殺しません。

2) サウルに誓う

でもまだ疑問は残ります。サウルのことはそうだったとしても、ダビデを憎んでいたサウル一族はどうか。ダビデはサウル一族を倒さなかったのか。確かにダビデとサウル家の間は複雑でした。サウルとその息子ヨナタンが戦場で倒れたとき、サウル家の人々はすぐに考えました。次の王さまは当然サウル家から出すべきである。いっぽう、ダビデが亡命先から帰国して王になる準備を進めます。当然そこに衝突が起きていきまし

た。それで、ダビデは彼らを根絶やしにしたのか。いいえ、そうしません。そうできないもう一つの事情があったからです。

先ほどのほら穴に隠れていたときの話の続きがあります。ダビデはサウルを殺す代わりにサウルの衣の裾を切り取ってしまいます。それをやってしまった後で心に痛みを感じたダビデは、サウルの前に出てそのことわびることにしました。サウルはダビデの信仰を見て涙を流し、自分のしてきたことを悔います。そればかりか、ダビデにこうお願いするのです。「さあ、主にかけて私に誓ってくれ。私のあとの私の子孫を断たず、私の名を私の父の家から根絶やしにしないことを。」(第一サムエル 24 章 21 節)

ダビデの時代、王となった者は先代の王の世継ぎを根絶やしにするのが当然の習わしでした。ですからサウルの願いは非常に虫がよい。でもダビデは言われたとおりに誓います。それで実際にダビデはどうか。根絶やしにしないという消極的なことではなかった。サウル家の世継ぎであったメフィボシェテを一生懸命捜し出し、自分の家族同様の待遇で迎えることさえしました。

こうして見ると、ここに出て来る敵がサウルであるとかサウル一族であると考えるのは無理がありそうです。むしろ肉の目で見えないものを指していると考えるべきでしょう。では、それはなにか。

3 神

1) その道は完全

その前に、31 節のみことばを見ておきます。「神、その道は完全。主のみことばは純粹。主はすべて彼に身を避ける者の盾。」

私が育った家には神棚が飾ってあり、正月

になると祖父や父がお膳を供えて、拜んでおりました。神棚の横には七福神の絵もつるさされていて、そういう光景を見ながら育ちました。神のご機嫌をそこなってはならないと恐れ、神が味方になってくれるかどうかは運次第。神棚に飾られている神が完全であるとは考えたこともありませんでした。

ところがダビデは、「神、その道は完全」と言います。確かに神はこの世界を造られたのですから完全と言えるでしょう。でもあまりにも完全であるのでしょうか。ときどき、自信満々で何でもできて、何でも知っている何でも完璧にこなす方がいます。そんな人を見ると私は逃げ出したくなります。神も、「その道は完全」と言われてしまうと、あまりにも偉すぎて近づきたいとは思いません。

2) あなたの謙遜 (36 節)

ところが36節にこうある。「あなたの謙遜は、私を大きくされます。」何でもできる人の前では、身が縮こまり小さくなるしかありません。ところが聖書の神の前に出るとき、私たちは大きくされていくのだというのです。別に私たちのからだが大きくなるわけではない。神のほうが身を低くされ、小さくなられ、謙遜になってくださるので、自然に私たちが大きくなる。それが私たちの神であるというのです。

3) 油注がれた者に施される恵み (51 節)

では神はどれくらい謙遜なのでしょう。ダビデこう言いました。「主に油注がれた方、私の主君に対して、手を下すなど、主の前に絶対にできない。」油注がれた方とは誰か。もちろん決まっている。サウルのこと。確かにそうです。主に油を注がれたサウルは殺し

てはならないとダビデは信じていました。

では、私たちはどうでしょうか。パウロはこう言っています。「私たちをあなたがたといっしょにキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。」(第二コリント1章21, 22節)

もし心に聖霊が与えられているならば、あなたも油注がれた者と同じ扱いを受ける。そう言っています。もしそうであるなら、どうなるか。ダビデをいじめ、殺そうと企んだサウルでさえ殺されてはならないのです。同じように、私たちが神に刃向かった罪人でありながら、殺されてはならない。そう言っていることになります。

そのために主はどうされたのか。主はイエス・キリストと呼ばれています。キリストとは、油注がれたという意味です。ダビデによれば、殺されてはならない方のはずです。ところが、私たちはこの方を十字架で殺しました。ダビデによれば、私たちは主に逆らったことになります。逆らった者であるのに、主が低くなられ、謙遜になられたために、私たちは大きくされる。すなわち殺されることがない。そのような恵みを受けていたことになります。

51節にこうあります。「主は、王に救いをまし加え、油注がれた者、ダビデとそのすえに、とこしえに恵みを施されます。」一見、ダビデとその一族の繁栄を言っているかのように聞こえます。油注がれた方が主イエス・キリストのことを指すとするなら、この方が十字架で死んで終わるのではない、主がよみがえることをダビデは告げていたことになります。そしてもし油注がれた者が、主

の十字架の贖いを信じた者を指すならば、主を信じる者の永遠に恵みが注がれる。肉体の死は、滅びとはならない。私たちは永遠のいのちの約束のなかにある。ダビデはそう語っていたこととなります。

そうすると、ダビデが語った敵とは誰のことであったのかが自然に導かれてまいります。敵とは私たちを苦しめている罪であり、罪から来る報酬としての死のことでした。ダビデ自身もその罪に苦しみました。しかし、主が身を低くされ謙遜になられたとき、死は滅ぼされていく。このような主の十字架のみわざをダビデは歌っていたのでした。

私たちは神から恵みをいただいていると告白していますが、その恵みはどこから来たのか。もう一度覚えたい。すべて主が十字架で示してくださったへりくだり、謙遜から注がれていたことを思い起こし、御名をほめたえします。